

学校名 おおいたけんおおいたしりつおおざいしょうがっこう 大分県大分市立大在小学校

校長名 中小路 勝也

所在地 〒870-0263 大分県大分市横田1丁目15番58号

TEL 097-592-0004

FAX 097-592-0219

E-mail ozas@oita-sd.jp

URL <http://www.oct-net.ne.jp/~oozai-e1/>

1. 研究主題

「“わかる” “できる” “たのしい” 発達段階に応じた授業の工夫」

～運動の楽しさや喜びを味わわせ、意欲的に動きを高めさせるための指導方法の工夫～

2. 研究の期間

平成24年度～平成26年度

3. 研究の目的

全国体力・運動能力、運動習慣等調査の報告では、「体育が好き・楽しい」と感じている児童が多いものの、低学年の頃から苦手と感じている児童や、高学年になるにつれて嫌いになった児童も少なくないことが報告されている。また、体育の授業が楽しくなるきっかけの一つが「できるようになること」であることから、運動の楽しさを味わわせ、運動好き・体育好きな児童を増やす授業の工夫が求められている。

本研究では、一人一人が発達段階（自分の力）に応じた課題（めあて）をもち、友達と学び合いながら「わかる・できる」経験を積み重ねることを通して、意欲的に運動の「楽しさ」を味わうことができる児童の育成を目指した。

4. 研究の方法・実践内容

研究は、管理職の指導の下、各学年代表者で構成される研修部が中心となり、全教職員で進める。以下は、3年間を通し、検証・改善を行いながら実践した内容である。

(1) 検証授業により、仮説の検証を行う。

① 体づくり運動、器械運動等における自分の力に応じためあてづくりはどうすればよいか。

○ 自分の力の実態を知り、お手本となる動きとのずれから課題を見付け、自分に合っためあてをつくる。（視聴覚機器の活用）

② 系統的な指導や技術指導の重点を考えた学習の道筋（指導計画）はどうであればよいか。

○ 身につけておかなければならない力、基本的な運動感覚はどのようなものか。どうやって身に付けるか。

③ 課題解決につながる活動（場づくり）はどのように仕組みればよいか。

④ 体育での効果的な話し合い活動はどうあればよいか。

○ 学習カード、運動の音声化、ペア・グループ活動、みんなの体育の活用など

⑤ 低・中・高を見通した系統的な指導はどうあればよいか。

⑥ 体力向上に向けた日常的な取組・授業での運動量の確保をどのように行っていくか。

(2) 全学年の共同歩調のもと、子どもの運動技能や体力の向上をはかる。

① 体力テストの記録を分析し、劣っている項目の向上を目指して運動を工夫し継続する。

○ 準備運動や補強運動の中で、運動量の確保、多様な体の動かし方、主運動につながる運動などを行う。

② 実技研修等を通して、有効な指導の手だてを探る。

③ チャレンジタイムの有効活用を図る。

○ 火曜と水曜に3学年ずつ分けて実施

○ 固定施設遊び、ボール遊び、短なわ、長なわ、組体操、体づくり運動等

④ 体育的な環境整備を図る。

○ 用具の点検・補充・整理

○ 体育カードの作成、副読本の活用等

⑤ 体育専科・体力アップわくわく事業地域指導員との連携を図り、授業の充実や個別指導の充実を図る。

⑥ 日常（朝の時間や休み時間等）での取組

○ 朝の時間に腕立て伏せや腹筋運動を行う。

○ 朝の時間に、自主的な走り込みを行う。

○ 休み時間での短なわ、長なわ8の字跳び、固定遊具遊び、ボール遊びなどの運動に取り組む。

(3) 授業力向上のために、互見授業を行う。「かかわりあい」と関心・意欲や技能の高まりとの関係、系統性や重点を考えた指導等が、他

教科・領域に生かされるように工夫していく。

5. 研究の成果

- (1) 自分の力に応じためあてづくりでは、体づくりにおける運動が多岐にわたるため、教師が設定しためあてを子どもが選択する形が有効であった。理想の動きと自分の動きとのずれを映像や見合い教え合いの中で確認し、めあてづくりにつなげることができた。器械運動でも、技能レベルを設定し、タブレット端末で動きを確認しながらめあてを修正することができた。
- (2) 運動の系統性や技術指導の重点を考えた学習の道筋では、補助運動の中で主運動につながる動きづくりをすることが有効であった。頭はね跳びでは、技術指導の重点を「くの字」の姿勢をつくることに設定し、「頭支え」「膝伸ばし」「背中倒し」「腰開き」の順に体感させることが有効であった。
- (3) 課題解決につながる場づくりでは、課題ごとに易から難の場を設定し、技能に応じた挑戦ができるようにしたことが有効であった。器械運動では、スモールステップで易から難へと課題解決に合った場づくりを行い、踏み切り→空中姿勢→着地と局面ごとに分け、腰高姿勢や腕支持・空中感覚が身につくようにした。
- (4) 効果的な話し合い活動では、体づくり運動ではペアで「できていたか」「どこをどうすればいいか」という言葉かけをすることができた。器械運動では2~4人のグループ学習で視点を定め、技能レベルやめあてを考え、到達度を確認したり、出来具合を交流したりすることで、焦点化された話し合いへとつながった。
- (5) 体育専科教員の訪問校・体力アップわくわく事業の地域指導者との連携により、専門的な指導を学ぶことができ、多種多様な場の設置と安全確保の面で効果がみられた。

6. 今後の課題

- ・場が増えると教師の目が行き届かないところがあり、適切なアドバイスが難しかった。
- ・多様な動きをつくる運動のように、場や動きが広がる場合では、どの運動や技能が自分にとって一番の課題であるかを判断し、解決方法を選択することは難しい。
- ・確かなめあてづくり（話し合い）にかかる時間やタブレット端末などの数の確保、機器のスムーズな活用が課題だ。

- ・ペアやグループを活用した効果的な話し合い活動のあり方は、今後も研究を継続したい。

7. 研究の意義、発展性

文部科学省による「体力・運動能力調査」によると、ここ十数年間続いていた児童の体力の低下傾向に歯止めがかかっているとされたものの、依然として低い水準にとどまっている。

一つの要因としては、児童を取り巻く生活環境や生活様式の変化により、日常生活において、歩く時間や運動量が減少したことが考えられる。

また、児童の遊びが室外での遊びからゲームなど室内での遊びに移行していること、時間・空間・人の減少、さらには生活習慣の乱れなどが要因とされている。

本校では、88年前から体育科を校内研修の柱とし、児童の体力づくりや体育の授業づくりについて継続して研究を深めてきた。特に、めあて学習のなかで子ども同士のかかわり合いや、低・中・高学年を見通した系統的な指導について研究を進めてきた。また、その中で「付けたい力」「付けなければならない力」（技術指導の重点）、確かな力を付けるための指導法（いつ・何をみせればいいのか、基礎感覚・基礎技能を養うためにどんな練習をすればいいか）等、教師の指導の大切さを、再認識することができた。

調査結果から、児童の体力・運動能力が向上していることがわかる。児童の姿に変容が現れると、職員の体育学習に対する意識が変わり、また他の教科への取組にも影響してきた。

しかし、授業研究は深まっているものの、児童の運動の日常化は十分とはいえない。体力向上に向けて、児童の体力づくりや体育の授業づくりについて個々がさらに研鑽を積む必要がある。

現在大分市では、中学校区ごとに小中一貫教育の取組を行っている。本校も大在中・大在西小・大在小の3校による大規模校の連携型小中一貫教育に取り組んでいる。

9年間を見通したカリキュラムの作成をもとに、今後も運動の楽しさを味わわせ、運動好き・体育好きな児童を増やす授業の工夫を学校全体で組織的に取り組み、日常化させていきたい。

また、体力向上は生活習慣と密接に結びついていることから、より一層学校と家庭との連携を図り、児童の生活習慣の改善に向けて取り組んでいきたい。